

50 の質問で読み解く 18 世紀イギリス小説 (4)

藤 田 佳 也*

Reading 18 century English novels with 50 questions (4)

Yoshiya FUJITA*
(Accepted 8 July 2019)

34. 『シャミラ』を書いたのは誰か？

次に Henry Fielding (1707-1754) へと話を進める。フィールディングは、イングランドおよびウェールズにおいて 13 歳から 18 歳の子どもを教育する私立学校であるパブリック・スクールの Eton で教育を受けるが、経済的な理由のために大学には進まず(ある娘を誘拐しようとして失敗したことも原因の一つだといわれている)、親戚に当たる Lady Montague (イギリスの女流書簡文名家・旅行家)の後援によって劇作を始め、後にオランダの Leyden 大学で古典を学んだ。リチャードソンとは全く別の階層の出身である。

劇作家となり、30 歳になる頃までに 25 編ほどの劇を書いていたが、1737 年に劇の上演に関する検閲令である Licensing Act が公布されたことから、転身を余儀なくされる。この検閲令は、当時のウォルポール首相の腐敗した政治・私生活に対してフィールディングを始めとする劇作家たちが批判的な劇を書いたために公布されたものであった。この検閲令により、フィールディングは自分の書きたい劇が書けなくなり、経済的に困難におちいるが、弁護士、治安判事を務め、雑誌論文の執筆を経て、小説家となった。ちなみに、Licensing Act のために、劇作家から小説家へと転身をはかった者は多かった。フィールディングは、劇場での経験から、叙述の区切り方、最小限の言葉でいかに場面を設定するか、短い簡潔な会話でいかに筋を運ぶか、など多くを学んだ。

『パミラ』のところで言及した *An Apology for the Life of Mrs Shamela Andrews* (1741) であるが、執筆したのは誰か。本人は否定しているが、作者はおそらくフィールディングであろうといわれている。

sham は、"something false pretending to be the real thing" 「にせもの」「いんちき」の意味で、主人公 Shamela は Pamela とは正反対の女性に設定されており、『パミラ』のインチキさを糾弾する内容となっている。

では、フィールディングはなぜ『パミラ』が気に入らなかったのであろうか。フィールディングの父親の 4 度目の結婚相手は使用人のメイドであった。『シャミラ』で主人を陥れて結婚しようとするメイドを書いたきっかけのひとつは、父親のこの再婚であるかもしれない。『パミラ』の最大の教訓は、純潔を必死で守り抜けば、最後には立派な報酬が返ってくる、というものであるが、フィールディングは、実の母の代わりに母となった元メイドの姿を横目で見ながら、この思想のいかがわしさ、つまりパミラの貞淑は一種の社会的野心の裏返しではないのかと感じ、それを批判しているといえる。

しかし皮肉なことに、1747 年、フィールディング自身も最初の妻シャーロットの病死后、そのメイドと結婚している。フィールディングの父親と同じく、メイドと結婚したことは話題になり、揶揄の対象となった。

さらにフィールディングは、『パミラ』のパロディとして *The History of the Adventures of Joseph Andrews* (1742) を書いている。これは、パメラの弟を主人公にした小説であり、フィールディングは男女を逆転させ、今度は女主人に誘惑される下男を描いてみせた。前半は『パミラ』のパロディであるが、後半は独自の小説となっている。執筆を進めるなか、フィールディングはパロディを書き続けることに飽きてしまったのかもしれない。

主人公ジョゼフは 10 歳の時に、『シャメラ』に登場するシャメラの主人ブービー氏のおじのサー・ト

* 農食環境学群循環農学類英語圏文化研究室

English-Speaking Culture, Department of Sustainable Agriculture, College of Agriculture, Food and Environment Sciences

マス・ブービーの家に使用人見習いとして入り、17歳になると、レイディ・ブービーに気に入られて、彼女つきの下男となる。レイディ・ブービーの寝室に呼ばれたジョゼフは、裸でベッドに寝たまの女主人にベッドへ招き入れられそうになり、必死で抵抗したところ、怒ったレイディ・ブービーに部屋から追い出される。貞操の危機に悩んだジョゼフは、姉のパミラに手紙を書いて相談する。レイディ・ブービーは再びジョゼフを誘惑しようとするが、ジョゼフが貞操を堅く守って応じようとしないので、激怒のあまりジョゼフを解雇、ジョゼフは幼なじみで許嫁のファニーのもとへ戻ろうと旅に出る。屋敷を出た後は、ジョゼフが道中でさまざまな冒険をするという、いわゆるピカレスク小説となっており、作品としてもより完成している。

フィールディングは、序文において、“a Comic Epic-Poem in Prose”「散文で書いた喜劇的叙事詩」と自らの作品を評し、“this kind of writing, which I do not remember to have been hitherto attempted in our language”と続けている。(Fielding 1987) 叙事詩というのは、一般的には民族の英雄や神話、民族の歴史として価値のある事件を物語として語り伝えるものであり、喜劇であることはありえないし、散文で書いているのであれば詩であるはずもない。フィールディングが言いたいのは、自分がイギリスの小説において何か新しいことをやっているということであろう。

35. 人生は旅か芝居か？

こういったパロディ作品の執筆を経たのち、*The History of Tom Jones, A Foundling* (1749) が出版される。その特徴の一つは劇的構成をとっている点にあるが、この点においてはリチャードソンと類似している。『パミラ』と同様、『トム・ジョーンズ』においても、特定の場面が拡大され描かれていく。

また、演劇の比喩自体も頻繁に姿を現す。たとえば、第7巻第1章のタイトルは“A Comparison between the World and the Stage”となっている。このように、人の一生を芝居と重ねる考え方の根本にはシェイクスピアがある。以下の『お気に召すまま』『マクベス』のセリフは最もよく知られた例だろう。

All the world's a stage,
And all the men and women merely players.
(As You Like IT, II. vii. 139-40)

この世界すべてが一つの舞台、

人はみな男も女も役者にすぎない。

(松岡和子訳)

Tomorrow and tomorrow and tomorrow
Creeps in this petty pace from day to day
To the last syllable of recorded time,
And all our yesterdays have lighted fools
The way to dusty death. Out, out, brief candle!
Life's but a walking shadow, a poor player,
That struts and frets his hour upon the stage,
And then is heard no more; it is a tale
Told by an idiot, full of sound and fury,
Signifying nothing.

(Macbeth, V. v. 24-8)

明日も、明日も、また明日も、
とほとほと小刻みにその日その日の歩みを進め、
歴史の記述の最後の一言にたどり着く。
すべての昨日は、愚かな人間が土に還る
死への道を照らしてきた。消えろ、消えろ、
束の間の灯火！
人生はたかが歩く影、哀れな役者だ、
出場のあいだは舞台で大見得を切っても
袖へ入れればそれきりだ。
白痴のしゃべる物語、たけり狂うわめき声ばかり、
筋の通った意味などない。

(松岡和子訳)

テキストにおいて、近代小説以前の物語として第1章で扱われている、John Bunyan の *The Pilgrim's Progress* (1678) などは、人生を旅ととらえる見方の代表といえるだろう。詳しいタイトルは、「この世からやがて来るあの世への巡礼者の行程。夢の形で語られ、出発の様子、危険な旅、願望の国への無事な到着が語られる」であり、その内容は以下の通りである。ある時、語り手が夢を見る。その夢の中に背中に荷物を背負い、一冊の書物を読んでいる一人の人物、主人公クリスチャンが現れ、彼が“the City of Destruction”, “Slough of Despond”, “Vanity Fair”, “Doubting Castle”を経る長い旅の末“Celestial City”にたどり着く。人の一生は旅であるという考えが根底にあるのがわかる。

ここで、これまで扱ってきた『ロビンソン・クルーソー』『ガリヴァー旅行記』『パミラ』『トム・ジョーンズ』を並べたときに気づくことはないか、と学生たちに問いかけてみる。章分けすら全くされていない『ロビンソン・クルーソー』。4つの旅に分けられ

たうえ章分けもされている『ガリヴァー旅行記』。主人公の人生において重要な特定の場面がピックアップされ描かれていく『バミラ』『トム・ジョーンズ』。このように並べてみると、人生を旅ととらえる考え方から、人生を芝居ととらえる考え方へと変化してきていることが見てとれ、非常に興味深い。

ここで、人生を芝居ととらえる考え方との関連で、画家 William Hogarth (1697-1764) にふれる。ホガースは、人生を旅ととらえる考え方から、芝居ととらえる考え方への変化の過渡期を典型的に示している画家であるといえる。彼は主にロンドンの庶民の生活を、続きものの絵として、生き生きと描いた。『ロビンソン・クルーソー』は、時間の経過にしたがって過去から未来へと叙述がなされているが、ホガースの絵は、人の人生を切断して、ある場面を選び出して描いている。これは芝居に近いといえるだろう。

また、『天路歷程』や『ロビンソン・クルーソー』においては、主人公は神によって救いが与えられるが、ホガースの絵では主人公は惨めな最期をとげる。その点において、ホガースの絵は『天路歷程』や『ロビンソン・クルーソー』に対する風刺であるともいえる。

フィールディングは、1731年頃ホガースと知り合いになり、彼の絵を高く評価していた。『トム・ジョーンズ』の中でもたびたび、ホガースの絵に対する言及がある。具体的には、第1巻第9章では *The Harlot's Progress* の4枚目に、第1巻第11章では *Four Times of the Day* の“Morning”に、第2巻第3章では *The Harlot's Progress* の3枚目に、第2巻第9章では *The Harlot's Progress* の最後の絵に、第3巻第6章では *The Harlot's Progress* の3枚目に、第6巻第3章では *The Distressed Poet* にそれぞれ言及している。

フィールディングは『トム・ジョーンズ』において、ホガースと同様に時間に沿って叙述する代わりに、ある一つの場面を取り出して物語を展開させている。また、『ロビンソン・クルーソー』では、主人公は孤独で、旅に出たり、孤島に取り残されたりするが、『トム・ジョーンズ』では、主人公以外の人物が多く登場し、互いに交渉をもちながら物語が展開される。これらの点で、ホガースの絵が橋渡しの役割を果たしているといえるだろう。

36. どうやって絵は読むべきか？

ここで、『トム・ジョーンズ』でも言及の多い、ホガースの *The Harlot's Progress* (1732) を学生たち

と鑑賞してみることにする(絵はウィキペディアより)。解説本を参照しつつ(小林、斎藤 2011, 森 1981, Hogarth 1890), 学生たちに随時ヒントを与えながら、1枚ずつ物語を解き明かすように読んでいきたい。まずは1枚目から。



Plate 1

場面はロンドン。駅馬車が到着して、そこから降りて来た娘に、何やらいかがわしげな中年女性が話しかけている。娘の名前は Moll Hackabout であることが後にわかるが、右手前に置かれた大きなトラUNKに MH のイニシャルがある。

「モル」という名前は、デフォーの小説 *Moll Flanders* (1722) を思い出させるが、メアリーの愛称である「モル」は、しばしば娼婦を表す俗語として使われた。この名前から、今ロンドンにやって来たばかりの無邪気そうな娘の行く末が想像できる。その彼女が乗って来たのが駅馬車で、画面左側に描かれている。馬車の中には他にも娘の姿が見えている。

ここでモルは、鋏と針刺しを持っている。ロンドンでお針子でもするつもりで上京したのだろう。彼女のバスケットに入っているガチョウの届け先は、“my loving cousin in Thames Streets”と書かれている。そのいとは何らかの理由で彼女を出迎えるのが遅れてしまったのかもしれない。その隙をついて、モルに話しかけている中年の女の顔には、黒いものが見えるが、これは天然痘の痕であると考えられる。この女性はいわゆる女術で、無邪気な娘をたぶらかして娼婦にしようとしている。仕事を探すモルに言葉巧みに近づき、すぐに金が入る職業があるとでも持ちかけているのであろう。

その女術の右後ろにいるのは、売春宿の主人とその手下のぼん引きである。売春宿の主人はモルに目を付け、ぼん引きに話をつけるように指示している。

女衞の誘いを逃れたとしても、次の魔の手が待ち構えているということになる。彼ら2人が立つ家は、ロンドンのチープサイドにあった「ベル・イン」。その名前のおと酒場だが、同時に売春宿でもあった。当時、酒場がいわゆる「ラブホテル」として使われるのは普通だった。ちなみに大きな鐘が見えているが、これは店の看板である。そして「ベル」とはフランス語で「美しい娘」の意味で、この酒場には美しい売春婦がいることを示唆している。

ヨークからのワゴンに同行して来た牧師は、娘たちに対して、都会の誘惑に気をつけるようにと警告を発しているが、そのうちの一人が今まさに売春宿のおかみに連れ去られようとしていることに全く気づいていない。また、彼は自分が乗っている、お腹をすかせた馬がこれから引き起こすことになる惨事にも、全く気づいていない。おそらくこの直後、倒れた飼葉桶に驚いた馬が牧師を振り落とす、という場面が展開するはずである。「灯台下暗し」ということわざを思い出させるが、ここには、牧師、教会、さらにはキリスト教に対する痛切な皮肉がうかがえる。



Plate 2

2枚目の絵において、主人公の状況は大きく変わっている。売春婦となった主人公は、売春宿を出て、ある金持ちのユダヤ人の愛人となっている。部屋の様子から、彼女は贅沢な暮らしをしていることがわかる。ペットのサルと召使いのアフリカ系の少年も、この売春婦がどれだけ贅沢な暮らしをしているかを示す。部屋の豪華さと壁にある2枚の絵から、ユダヤ人が相手であると判断できる。これらの絵は、ユダヤ人が好んで壁にかけるもので、左はヨナ、右はウツザを題材としたものである。

『旧約聖書』ヨナ書の主人公はアミタイの子、預言者ヨナ。ヨナは神から、イスラエルの敵国である

アッシリアの首都ニネヴェに行き、「ニネヴェの人々が犯す悪のために、40日後に滅ぼされる」という預言を伝えるよう命令される。しかしヨナは、敵国アッシリアに行くのが嫌で、船に乗って反対の方向に逃げ出す。このため、神は船を嵐に遭遇させた。ヨナがそれまでの神との事情を船乗りに話すと、船乗りたちはヨナが神の怒りに触れたのだと考え、手足をつかんで海に投げ込んだ。ヨナは大きな魚に飲み込まれ三日三晩、魚の腹の中にいたが、海岸に吐き出された。

しかたなく、ヨナがニネヴェにいて神のことは告げると、意外なことに人々はすぐに悔い改めた。指導者はニネヴェの人々に悔い改めと断食を呼びかけ、人々が実行したため、神はニネヴェの破壊を考え直して、中止した。ヨナは、一度滅ぼすと言ったがそれを中止し、イスラエルの敵であるニネヴェの人々をゆるした神の寛大さに激怒する。ヨナがその後、庵を建てて住んでいると、その横にひょうたんが生えた。ヨナはひょうたんが陰を作り、日よけになったので喜ぶが、神は熱風を送ってひょうたんを枯らしてしまう。ヨナが激怒して、怒りのあまり死にそうだと訴えると、神はヨナにむかって「ヨナがひょうたんを惜しんだように、神がニネヴェを惜しまないことがあるか」と諭す。一方、ウツザは、絶対に触れてはならないと神に命じられた、モーゼの十戒を刻んだ2つの平らな石を納めた櫃である契約の箱に触れようとしたため、罰として神によって殴り殺される。これら「応報、天罰、報い」の物語は、ユダヤ人そして未来の売春婦双方に当てはまるといえるだろう。

この2枚目の絵は、ユダヤ人がある朝、予告なく愛人の部屋を訪れた場面を描く。彼女はお茶を出す。前の晩の仮面舞踏会で知り合った若い男（化粧テーブルの上に仮面がある）がまだベッドの所に隠れていて、彼女は彼を逃がすために、突然わざと怒ったフリをしてテーブルをひっくり返す。女性の右手は、若い男に対してこの隙に出て行けとの指示を出している。

また男の方は、召使いに静かにするように身振りで伝えている。男が手にしているベルトは、前の晩に2人が関係をもったことの暗示である。モルが、たった1枚の絵の経過のなかで、随分としたたかな女性になったことがわかる。

第3枚目では、結局ユダヤ人に浮気がバレて捨てられてしまったらしく、モルは再び普通の売春婦となっている。2枚目と同様、朝のお茶の光景であるが、状況は大きく変わっている。さらに、ペットの



Plate 3

サルはネコに、ヨナとウツザの絵は当時有名だった2人の反社会的人物の絵に変わっている。ホガースはこういった対比を非常に巧みに用いる画家であった。学生たちにも絵を解説する際のコツとして伝えておきたい。

その2人とは、Captain Macheath と Henry Sacheverell。マックヒースは、18世紀前半の大ヒット作品、John Gayの*The Beggar's Opera* (1728)に登場する辻強盗であり、サッシュヴェレルは18世紀前半、その激越な説教で政権にとって脅威となり、一度は死刑宣告をされたものの、これを免れた人物。モルはその両者に心酔していたのであろう。

狭い部屋の大部分を占めているのは商売道具であるベッドだが、左の壁には魔女の帽子と木の枝を編んだ鞭がかけられている。魔女の帽子は売春が悪魔の仕事であることを示唆し、鞭は客のなかにこれで折檻されるのを喜ぶ人間がいたことを示している。この鞭打ちはJohn Clelandの*Fanny Hill* (1748)にも登場するが、イギリス人が密かに愛する性技として、よくとりあげられるものだった。

ベッドの上には、James Daltonという有名な追いはぎのカツラを入れる箱がある。これは彼女が彼の愛人になっていることを暗示している。彼女の相手は裕福なユダヤ人から追いはぎに変わっているということになる。ダルトンは実在の辻強盗であり、ホガースのこの絵が発表される直前の1730年にタイバーンの処刑場で公開処刑となっている。この不吉な箱は、モルの運命を暗示しているといえるかもしれない。自分の前に暗い未来が広がっていることなど知るよしもない主人公は、懐中時計を手にし、誇らしげにニヤツとしている。これは客から盗んだもので、売春だけではなく盗みもするようになっていることがわかる。

そこへ、Sir John Gonsonに率いられた娼婦狩りのグループが入ってくる。ゴンソンは18世紀前半、鬼のような治安判事として評判をとった人物で、50年にわたって悪徳の除去に凄まじい意欲を燃やしていた。彼は部下を連れて売春婦モルの逮捕にやって来たのである。

さらに、2枚のポर्टレートの上にある飲み薬と軟膏が、彼女が性病にかかっていることを示しており、刑務所よりももっと恐ろしい「報い」が彼女にやってくることを暗示している。よく見ると、女中の鼻が欠けており、彼女もまた性病にかかってしまっていることがわかる。



Plate 4

第4枚目において、主人公モルは、刑務所で麻を打っている。ここは、プライドウェル監獄。これは「感化院」「矯正院」と呼ぶべきものであり、目に余るような暮らしをしている、あるいは都市の治安、風紀を乱しかねないと思われる人間たちをできるだけ一般人から隔離し、まともな暮らしぶりを身につけさせるべく、厳しい指導・しつけを行う場所であった。そうした場所の一つとして有名だったのが、プライドウェル監獄で、もともとはヘンリー8世の時代に宮殿として建造されたものであった。

隣で麻を打つ紳士の前にある破れたランプは、彼がいかに賭博の罪で刑務所に入れられていることを暗示している。ホガースにはよく見られる描写である。看守の妻は、主人公の綺麗な服をつまんで夫にウインクしている。そして看守は、厳しく彼女に当たっている。この服は、主人公が過酷な労働のせいで倒れた際、一時的に休ませてもらうために賄賂代わりに差し出されることになる。看守の妻が、早く服がほしいと夫にもっと彼女を追い込むように頼んでいる、というわけである。

一方、召使いはダニを潰している売春婦の隣に

座っている。奥の壁には、絞首刑に処せられている人物の絵があり、自分たちが打っている麻がなにに使われるかを、囚人たちに不気味に思い出させている。

モルの後ろには、文字が書かれた板が見えるが、「こんな風に立っているより、働く方がいい」と書かれている。よくわからない言葉だが、この下に男が板の穴の中に手を入れて拘束されている姿の像が見える。これは18世紀によく見られた処罰で、それほどの重罪でなければこの処罰を受けるだけで釈放されることがあった。この処罰を受ける者は、さらし台と呼ばれるものに両手と首を入れられ、街頭に放置されて一日のうち何時間かを過ごさなければならない。下手をすれば、石などを投げつけられて、結果的に命を落とすこともあった。デフォーなども、ジャーナリストとして数々の文章を発表するなか、当局の怒りを買って逮捕され、罰としてこの刑を受けたことがあった。これは、監獄での労働をサボれば、こういう処罰を受けることになるという脅しだろう。



Plate 5

第5枚目の絵は、主人公の売春婦が梅毒で息を引き取る場面である。2人の医者が治療法に関して言い争っている。18世紀においては、実際、性病は治ることも多かったが、ここにはイングランドよりも大陸でよく言われたジョーク“Cause of death—two doctors”が表されている。2人のモデルは、いずれも当時、悪名高かった医者で、2人が手にしている薬の容器は3枚目の絵にあった薬の容器と同じものであるが、どちらの薬を使うかで言い争っていると考えられる。

葬式の準備をするために駆けつけトランクをあさっている女性と、二人の医者への無関心さに、召使いは憤慨している。あるいは女性は家主の妻で、モ

ルの衣装や靴、魔女の帽子などを引っ張りだし、これらを滞納した家賃の代わりにしようとしているという解釈もできる。



Plate 6

最後の第6枚目の絵で描かれているのは、モルの葬式の様子である。棺桶の蓋の上には書き付けがあって、そこには1732年9月2日、23歳でモルが死亡したと書かれている。田舎から出て来た無垢な少女は、ロンドンに着いたその日に売春婦となり、そこで知り合った金持ちのユダヤ人の愛人となった後、再び貧しい娼婦に転落し、性病を患って、監獄暮らしを体験した果てに、ついには23歳の若さで死んでしまったのだ。棺桶の前で独楽をいじって遊んでいる遺児が哀れである。

集まっているのは、仲間の娼婦たちがほとんどだと考えられ、梅毒を患っている証拠の斑点が顔に見える。画面中央にいる黒い服を着た2人の娼婦はジンを飲んでいるし、女中も酒のグラスを棺桶の上に置いていて、棺桶がバーのカウンターのようになっている。

画面右端で嘆く女性は、モルをこの道に引きずり込んだ女街で、一見、葬儀の状況を目にして嘆いているようにも見えるが、彼女が泣いているのはモルの死によって稼ぎ手が減ったことによるものであり、決してその死を悲しんでいるわけではないのかもしれない。

画面右側で、葬儀屋は参列している女性といちゃついている。画面左の2人のうち、女は娼婦であり、その隣にいる男は身なりからして聖職者である。終油の秘蹟を施すために呼ばれたはずなのに、女性の誘惑に反応してコップから飲み物をこぼしている。帽子で隠れてはいるものの、女性が恍惚とした表情を浮かべていることから、隣の女性の身体をまさぐっているという解釈もある。

中央の若い女性は、単に好奇心から死体を見つめているように感じられる。後方には、鏡に映る自分の姿を見るのに余念がない女性もいる。喪主である主人公の息子は、それらすべてに全く関心をもたず、一人独楽で遊んでいる。

絵というものも、単に観ればわかるものではなく、解釈を必要とする場合があることをホガースの例から学生たちに理解させたい。これまで観たことのある絵から気になるものを選び、解釈させてみるのもおもしろいだろう。

37. どうしてこんなに語り手が語るのか？

『トム・ジョーンズ』には、劇的要素に加えて、エッセイ的な要素がある。特に各巻の第1章には、小説の進行とは直接には関係のないことなども書かれており、登場人物の性格・行動や筋書きの説明をしたり、読者に読み方を教授するような内容のものもある。こういった箇所においては、語り手は、著者自身であるフィールディングに非常に近づいているといえるだろう。著者自身が小説に介入しているといっても良い。このような語り手の場合、語り手あるいは著者が間に入り込んでくることで、物語と読者との間に距離が置かれることとなり、読者はコメディの場合のように、一定の距離をおいて物語を楽しむことになる。

朱牟田夏雄訳を参照しながら、実際にいくつかを学生たちと読んでみることにする。

In all these, however, and in every other similitude of life to the theatre, the resemblance hath been always taken from the stage only. None, as I remember, have at all considered the audience at this great drama. (Book VII. Chapter 1)

ただし、古来人生を劇場に喩えた句は多いが、それらは常に人生を舞台の演技に似たりとするのみで、余の記憶する限り、人生というこの大活劇の観衆を考慮に入れた者あるを聞かない。

フィールディングは、小説にも芝居と同じように audience がいることを意識し、その重要性を強調する。ここでフィールディングのいう audience には、主人公を取り巻くさまざまな人々が含まれており、その人々が主人公を見る目も観客の目と考えられている。実際この小説では、トムに対する周りの人々の見方や考えから、トムとそして周りの人々を理解

できるようになっている。その点において、シェイクスピアの劇に、また小説の趣は全く異なるが、ドストエフスキーの小説にも似ているといえるだろう。

フィールディングが小説家になる直前に書いていた芝居は、芝居の稽古をやっているところを芝居にする rehearsal play と呼ばれるもので、作者、批評家、そして観客なども舞台上にいるというものだった。『トム・ジョーンズ』はその rehearsal play を発展させたものともいえるだろう。

『ハムレット』における劇中劇を具体例としてあげると、学生たちにも理解しやすいだろう。この劇中劇においては、『ハムレット』を観ている観客が、劇中劇を見ている登場人物と同列に並ぶことになる。観客が芝居に参加するといってもよい。そしてこの場合、観客は劇中劇を観ると同時に、登場人物たちの反応も見なければいけなくなる。劇中劇を観つつ、劇中劇を観ているクローディアスの反応を確認し、そしてそのクローディアスの反応を観察しているハムレット、ホレイシオの反応も意識しておかねばならない。さらには同席している宮廷人たちの反応も、状況を理解するのに必要となる。

さらに具体例をみよ。

... for as I am, in reality, the founder of a new province of writing, so I am at liberty to make what laws I please therein. (Book II. Chapter 1)

事実、余は文学における新領域の開拓者であるから、その領域内でいかなる法をつくろうと自由である。

ここでは、語り手の権利、語り手と読者の関係について、語り手を君主に、読者を臣下にたとえながら、上から目線で自分の考えを述べている。

さらに次の引用では、読者が果たすべき役割について言及している。

... thou art highly mistaken if thou dost imagine that we intended, when we began this great work, to leave thy sagacity nothing to do, or that, without sometimes exercising this talent, thou wilt be able to travel through our pages with any pleasure or profit to thyself. (Book IX. Chapter 11)

諸君が、もしこの大作にとりかかった我らの意

図を、なにひとつ諸君の賢断に委ねまいとする者のお考えなら、あるいはまた逆に諸君が、時にかかる才能を行使せずにもこの数巻を通読して自身の楽しみあるいは利益を獲得できるとお考えならば、それはどちらもとんだ思いちがいというものである。

語り手は読者に向かって、「何も考えなくても良いと考えるならそれは大間違いだ」と述べる。“sagacity”の形容詞形“sagacious”の意味は“having or showing deep understanding and good judgement”であり、つまり“sagacity”とは「物事を深く理解し、正しい判断を下せる能力」のことを指す。語り手は読者に“sagacity”を働かせ、作品に参加させようとしている。『トム・ジョーンズ』という小説が、あらかじめ意味がそこに含まれているような小説ではなく、読者の読むという行為によってはじめて意味が生まれるような小説である、という語り手、そしてフィールディングの考えがはっきりとわかる箇所である。

『トム・ジョーンズ』は、ドイツの Hans Robert Jauss や Wolfgang Iser らにはじまり、1960年代から70年代にかけて盛んとなった reader-response criticism「読者反応批評」においてよくとり上げられた。作品の意味は読者が決定するということが根底にある考え方であるが、作者と読者の「取引」から意味が生まれる、とすることから transactional theory と呼ばれることもあった。上記の引用などは語り手と読者のやり取りのわかりやすい例であろう。

Wayne C. Booth は、小説批評の古典 *The Rhetoric of Fiction* (1961) において、『トム・ジョーンズ』における語り手の役割を非常に重視し、読者と語り手が物語の展開とともに次第に親しさを増していく過程が、物語の主要なプロットに対して副次的プロットと呼べるものを形成していると述べている。(Booth: 216) 別な言い方をすれば、この小説は語り手が自覚的な読者を作り上げていく過程そのものともいえるだろう。こういった小説を現代の学生たちがどのように感じるか、聞いてみたいところである。

第5巻第1章には、脱線的な文章を各巻の冒頭に入れる理由が書かれている。

And here we shall of necessity be led to open a new vein of knowledge, which, if hath been discovered, hath not, to our remembrance, been

wrought on by any ancient or modern writer. This vein is no other than that of contrast, which runs through all the works of the creation, and may, probably, have a large share in constituting in us the idea of all beauty, as well natural as artificial: for what demonstrates the beauty and excellence of anything, but its reverse? Thus the beauty of day, and that of summer, is set off by the horrors of night and winter. And, I believe, if it was possible for a man to have seen only the two former, he would have a very imperfect idea of their beauty. (Book V. Chapter 1)

さてそうなるこの際我らは必然的に知識の新しい領域を開拓せねばならぬ。これは我らの記憶する限り、気づいた人はあっても、古今の文人が未だ委細に論じたことのない領域で、すなわち対照の妙という問題。全ての創作品に渡って、人工と自然とを問わずすべての物の美あるいは優越を証明するにはその反対物を持ち出すに如くものはない。かくして昼の美、夏の美は、夜あるいは冬の恐ろしさによって一層引き立つ。もし人が昼と夏だけを見るが可能とするならば、その人はその美しさをきわめて不完全にしか解し得まい、と余は信ずるのである。

ここでは、さまざまなコントラストを用いるのが自分の方法であると語り手は述べている。具体的には、登場人物の性格、出来事の状態、プロット、あるいは文体などがあげられるだろう。この方法を用いると、読者自身がその間を埋めなければならなくなってくる。作品に対する読者の積極的な参加を促す、一つの有効なやり方である。そこで、次にテキストの抜粋部分について、語り手の語り方、文体のコントラストの具体例を学生たちと読んでみたい。

38. 語り手は暗になにを語ってる？

It was now a pleasant evening in the latter end of June, when our hero was walking in a most delicious grove, where the gentle breezes fanning the leaves, together with the sweet trilling of a murmuring stream, and the melodious notes of nightingales, formed all together the most enchanting harmony. In this scene, so sweetly accommodated to love, he meditated on his dear Sophia. While his wanton

fancy roved unbounded over all her beauties, and his lively imagination painted the charming maid in various ravishing forms, his warm heart melted with tenderness and at length throwing himself on the ground, by the side of a gently murmuring brook, he broke forth into the following ejaculation.

‘Oh Sophia, would Heaven give thee to my arms, how blest would be my condition! … No, my Sophia, if cruel fortune separates us for ever, my soul shall dote on thee alone. The chastest constancy will I ever preserve to thy image. Though I should never have possession of thy charming person, still shalt thou alone have possession of my thoughts, my love, my soul … Sophia, Sophia alone shall be mine. What raptures are in that name! I will engrave it on every tree.’

At these words he started up, and beheld not his Sophia … No; without a gown, in a shift that was somewhat of the coarsest, and none of the cleanest, bedewed likewise with some odoriferous effluvia, the produce of the day’s labour, with a pitch-fork in her hand, Molly Seagrim approached. Our hero had his penknife in his hand, which he had drawn for the before-mentioned purpose, of carving on the bark; when the girl coming near him, cried out with a smile, ‘You don’t intend to kill me, squire, I hope!’ ‘Why should you think I would kill you?’ answered Jones. ‘Nay,’ replied she, ‘after your cruel usage of me when I saw you last, killing me would, perhaps, be too great kindness for me to expect.’ Here ensued a parly, which, as I do not think myself obliged to relate, I shall omit. It is sufficient that it lasted a full quarter of an hour, at the conclusion of which they retired into the thickest part of the grove.

第1パラグラフにおいて、ソファイアを想うトムの様子が語り手によって詩的な表現を用いて記述される。名詞、現在分詞、動名詞と文法的な役割をかえながら執拗に繰り返される“ing”形などについては学生たちも気づくことだろう。ここでもまた、原文で読むことの重要性を再認識させたい。

またこの箇所は、英語における fancy と imagination の違いをわかりやすい形で示してくれている箇

所でもある。fancy と結びついているのは, wanton, unbounded という語であり, 「気まぐれさ, 際限の無さ」が表されている。一方, imagination は, form という語からもわかるように, イメージに一定の形を与え具体化する能力を指す。日本語では混同されがちな両者の違いを理解したい。

また, ありとあらゆることが視覚化されることに慣れてしまっている現代人にとって, 書かれている言葉を頭の中で具体化しつつ読むということが不得意になりつつあるのではないかということ, 文学を読む際に限らず, 想像力をもって言葉に具体的なイメージを与えていくような読み方が重要であることを学生たちに伝えたい。現代人における想像力の欠如について, 自分の周りやこれまでの経験から具体的に学生たちに挙げさせてみても面白いだろう。

第2パラグラフのトムによる独白においては, “have possession of” といったフレーズの繰り返しや, “Heaven”, “cruel misfortune”, “The chastest constancy”, “my love, my soul”, “every tree” といった型にはまった表現, あるいは大げさな表現が繰り返し用いられている。ここで重要なのは, ここにある語り手の皮肉っぽい視線である。そしてそれはすでに第1パラグラフにおいて見られるものである。

7行目の“ravishing”は「魅惑的な」という意味で用いられているが, “ravish”という動詞の本来の意味は「強姦する」であり, また9行目の“ejaculation”は「不意に叫ぶこと」という意味で用いられているが, 本来の意味は「射精」である。独白においてトムはソファイアに“The chastest constancy”を持ち続けると宣言しているが, その宣言の前にトムの隠された欲望が語り手によって暴かれ, その言葉をあらかじめ相対化してしまっていることがわかる。そして実際, この独白の直後, トムはモリーと性的関係を持つことになる。語り手の極めて巧みな語り口が実感できる好例である。

39. 語っている内容と語り方がずれるとどうなる?

まずは, 古典修辞学における style について確認する。古典修辞学における style は, 題材との関係で決まってくる。high style は叙事詩, 悲劇, 英雄詩, 宗教詩に, middle style は恋愛詩, エレジーに, low style は牧歌, 風刺にそれぞれ用いられるのがルールであった。シェイクスピアもこの原理にしたがって, 創作を行っている。

さて, 畑仕事から帰ってきたモリーが通りかかる場面を見てみよう。彼女を描写している部分には “somewhat of the coarsest”, “none of the cleanest”,

“odoriferous effluvia”といった表現がみられる。ここでは通常は、叙事詩、悲劇、英雄詩、あるいは宗教詩などに用いられる high style が、畑仕事の帰りで汚れにまみれたモリーに対して用いられており、内容と文体にズレがある。high style がパロディ化されていることがわかるだろう。“odoriferous effluvia”というのは、要は臭い汗のことにすぎない。さらに、“somewhat”, “none”という表現は、“the coarsest”, “the cleanest”という最上級の表現とは相入れないもので、訳すと「幾分、最も粗野」「最も清潔では全くない」ぐらいになる。これもまた high style がパロディ化されているところであるといえる。

トムとモリーは口論の後、森の中へと姿を消す。語り手は、語る義務もないから、省略すると言いつつ、2人が森の一番深いところへと入って行ったと語る。「一番深いところ」が暗示しているのは、2人がそこで性的関係をもったということである。読者の sagacity を働かせようとする語り手の姿がはっきりと見えてくる部分である。

ここで、このような語り手の語り方の実例を学生たちに探させてみる。学生たちが普段読み慣れている小説とは全く異なる語り手とその語り方を実感させたい。

参考文献

- 阿部公彦『英語文章読本』(研究社, 2010)
- 阿部公彦『文学を「凝視する」』(岩波書店, 2012)
- 阿部公彦『小説的思考のススメ:「気になる部分」だらけの日本文学』(東京大学出版会, 2012)
- 阿部公彦『英語的思考を読む』(研究社, 2014)
- 阿部公彦『詩的思考のめざめ:心と言葉にほんとは起きていること』(東京大学出版会, 2014)
- 新井潤美『不機嫌なメアリー・ポピンズ:イギリス小説と映画から読む「階級」』(平凡社, 2005)
- 新井潤美『執事とメイドの裏表』(白水社, 2011)
- アリエス, フィリップ, 『「子供」の誕生:アンシャン・レジーム期の子供と家族生活』杉山光信, 杉山恵美子訳(みすず書房, 1980)
- ウイドウソン, H.G.『文体論から文学へ:英語教育の方法』田中英史, 田口孝夫訳(彩流社, 1989)
- ウイドウソン, H.G.『文学と教育:詩を体験する』梅沢時子, 野呂浩, 小田朗美訳(英宝社, 2005)
- 岡田伸夫, 南出康世, 梅咲敦子編『英語研究と英語教育:ことばの研究を教育に活かす』(大修館書店, 2010)
- 菊池繁夫, 上利政彦編『英語文学テキストの語学的研究法』(九州大学出版会, 2016)
- クック, ガイ『英語教育と「訳」の効用』斎藤兆史, 北和丈訳(研究社, 2012)
- 小林章夫『エロティックな大英帝国:紳士アシュビーの秘密の生涯』(平凡社, 2010)
- 小林章夫, 齊藤貴子『諷刺画で読む十八世紀イギリス:ホガースとその時代』(朝日新聞出版, 2011)
- 齋藤知也『教室でひらかれる「語り」:文学教育の根拠を求めて』(教育出版, 2009)
- 斎藤兆史編『言語と文学』(朝倉書店, 2009)
- 坂口京子編『文学の授業づくりハンドブック:授業実践史をふまえて』(溪水社, 2010)
- シェイクスピア, ウィリアム『マクベス』(ちくま文庫, 1996)
- シェイクスピア, ウィリアム『お気に召すまま』(ちくま文庫, 2007)
- 大学英語教育学会文学研究会編『英語教育のための文学案内事典』(彩流社, 2000)
- 高橋和子『日本の英語教育における文学教材の可能性』(ひつじ書房, 2015)
- 高橋英光『言葉のしくみ:認知言語学のはなし』(北海道大学出版会, 2010)
- 田中宏幸, 滝内大三『女性・仕事・教育:イギリス女性教育の近現代史』(晃洋書房, 2008)
- ダビディーン, デイヴッド『大英帝国の階級・人種・性:W・ホガースにみる黒人の図像学』(同文館出版, 1992)
- 浜井祐三子『イギリスにおけるマイノリティの表象:「人種」・多文化主義とメディア』(三元社, 2004)
- フィールディング, ヘンリー『トム・ジョーンズ』(岩波, 1975)
- 藤田佳也「50の質問で読み解く18世紀イギリス小説(1)」『酪農学園大学紀要』第42巻 第2号(酪農学園大学, 2018a) 41-52頁
- 藤田佳也「50の質問で読み解く18世紀イギリス小説(2)」『酪農学園大学紀要』第43巻 第1号(酪農学園大学, 2018b) 11-24頁
- 藤田佳也「50の質問で読み解く18世紀イギリス小説(3)」『酪農学園大学紀要』第43巻 第2号(酪農学園大学, 2019a) 43-51頁
- マッカーシー, マイケル『語学教師のための談話分析』安藤貞雄, 加藤克美訳(大修館書店, 1995)
- 真野泰『英語のしくみと訳しかた』(研究社, 2010)
- 三森ゆりか『外国語を身につけるための日本語レッスン』(白水社, 2003)
- 三森ゆりか『外国語で発想するための日本語レッスン』

- ン』(白水社, 2006)
- 村上春樹, 柴田元幸『翻訳夜話』(文藝春秋, 2000)
- 森洋子編著『ホガースの銅版画: 英国の世相と諷刺』(岩崎美術社, 1981)
- 吉村俊子他編『文学教材実践ハンドブック: 英語教育を活性化する』(英宝社, 2013)
- Biggs, John and Catherine Tang, *Teaching for Quality Learning at University: What the Student Does* (New York: Open University Press, 2011)
- Booth, Wayne C., *The Rhetoric of Fiction* (Chicago: Chicago University Press, 1983)
- Carter, Ronald and John McRae, *Language, Literature and the Learner: Creative Classroom Practice* (New York: Pearson Education, 1996).
- Collie, Joanne and Stephen Slater, *Literature in the Language Classroom: a Resource Book of Ideas and Activities* (New York: Cambridge University Press, 1987)
- Engetsu Yuko, ed, *Books on Children in 16th-18th Century Britain Series I: 1701-1750* (Kyoto: Eureka Press, 2007)
- Fielding, Henry, *Joseph Andrews With Shamela and Related Writings: Authoritative Texts, Backgrounds and Sources, Criticism* (New York: Norton, 1987)
- Fielding, Henry, *Tom Jones* (London: Penguin, 2005)
- Hogarth, William, *The complete works of William Hogarth: in a series of one hundred and fifty superb engravings on steel from the original pictures/with an introductory essay by James Hannay; and descriptive letterpress, by the Rev. J. Trusler, and E. F. Roberts* (London: London Printing and Publishing, 1890)
- Hall, Geoff, *Literature in Language Education* (New York: Macmillan 2015).
- Richardson, Samuel, *Selected Letters of Samuel Richardson* (Oxford: Clarendon Press, 1964)
- Richardson, Samuel, *The Novels of Samuel Richardson, vol. 1* (New York: AMS Press, 1970)
- Richardson, Samuel, *The History of Sir Charles Grandison* (London: Oxford University Press, 1972)
- Richardson, Samuel, *Pamela; or, Virtue Rewarded* (London: Penguin, 1980)
- Richardson, Samuel, *Clarissa: Or the History of a Young Lady* (London: Penguin, 1986)
- Richetti, John, *The English Novel in History, 1700-1780* (New York: Routledge, 1999)
- Simpson, Paul, *Language through Literature: an Introduction* (New York: Routledge, 1997)
- Stanzel, F. K, *A Theory of Narrative* (Cambridge: Cambridge University Press, 1986)

summary

A literary text is very effective in helping the students to have the experience of noticing and the practice of considering. What is the most important is where and how we should ask them questions in the class. Adequate questions at adequate times will motivate the students to consider about the text, and moreover, about the world and themselves. This paper proposes 50 effective questions in the class of 18th century English novels. In this part, 6 questions will be discussed mainly about Henry Fielding's *Tom Jones*.

